

論 文

瘦身願望と社会的比較 (Ⅲ)

—身体部位比較の検討—

¹ 諸井 克英 ² 守安 可奈¹同志社女子大学・生活科学部・人間生活学科・教授²同志社女子大学・生活科学研究科・生活デザイン専攻 2012 年度修了

Drive for thinness and social comparison (Ⅲ)

— Specific comparisons of body parts. —

¹Katsuhide Moroi ²Kana Moriyasu¹Department of Human Life Studies, Faculty of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor²Life Style Design Studies, Graduate School of Human Life and Science,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Graduate of 2012

Abstract

This examined how participants compared their body size with that of their same-sex peers. The authors developed a scale to measure specific comparisons of various body parts with same-sex peers. This scale and several scales used previously by authors (Moriyasu *et al.*, 2011) were administered to female adolescents ($N=190$). The factor analysis (the maximum likelihood estimation with promax rotations) of the specific comparisons scale yielded four factors, "the whole face and breasts," "frame," "thighs," and "hands." The regression analyses (the forward method) indicated that the global comparison of body size with that of their same-sex peers represented face-part comparison. The significance of this research was discussed from the viewpoint of face phenomenology.

Keywords: social comparison, thinness, thin-ideal internalization, female adolescents

I. 問題

瘦身願望と社会的比較との関係を共分散構造分析によって検討した先行研究では(守安・諸井・前原・松谷・小切間, 2011; 守安・諸井, 2012), 「対同性同輩比較(回答者と同じ大学に通学する女子学生との体型比較)→瘦身理想像内在化(理想的身体ステレオタイプを内在化

している程度(Stice, Ziemba, Margolis, & Flick, 1996)→瘦身願望」という影響経路が一貫して認められた。つまり, Festinger (1954) による社会的比較理論の基本的過程と一致して, 瘦身願望の形成・維持にとっても同性同輩との体型比較が重要であることが明らかになったといえる。

ところで, 先行研究で用いた対同性同輩比較

尺度は、5項目から構成され、各項目では「容姿」、「体つき」、「装い」、「外見」、「体型」という言葉が用いられている(守安ら, 2011 参照)。これらの言葉は、身体の全体的印象を指す言葉として用いたが、次の2つの可能性が考えられる。つまり、この言葉を回答者が①身体の全体的な印象と②身体の詳細な部位という2通りの受け取り方をしていた可能性である。①の場合にはもとの測定意図と一致しているので、問題はない。ところが、②の場合には、回答者が同性同輩のどのような部位に注目しているかを明らかにする必要があり、さらに、回答者によって比較部位が異なることもあり得る。

本研究では、先行研究と同一の測度(対同性同輩比較尺度)を用いて同性同輩との一般的な体型比較を行わせるとともに、身体の詳細な部位について同性同輩との比較をさせた。このようにして、これまでの研究で扱った対同性同輩比較がもとの狙い通りに身体全体の比較と対応しているのか、特定の身体部位の比較を反映しているかを実証的に検討する。

前研究では(守安・諸井, 2012)、「同性同輩」、「女性モデル」、「同性親友」、「母親」、「女性きょうだい」のように比較他者を細かく設定した。これに基づく、今回の研究でも、これらの比較他者ごとに同様の身体部位比較測定を行うべきである。しかし、次の2点を考慮し、本研究では「同性同輩」を比較他者とした。①先行研究で一貫して認められた「対同性同輩比較→瘦身理想像内在化→瘦身願望」という影響経路、②多様な比較他者ごとに身体部位比較を求めた場合の回答者にかかる評定上の負担。以上の目的のために、女子大学生を対象に質問紙調査を実施した。

Ⅱ. 方法

調査対象および調査の実施

同志社女子大学での社会心理学関係の講義を利用して、質問紙調査を実施した(2011年12月22日)。回答にあたっては匿名性を保証し、質問紙実施に調査目的と研究上の意義を簡潔に

説明した。青年期の範囲を逸脱している者(25歳以上)を除き、以下の尺度に完全回答した女子学生190名を分析対象とした(1回生61名、2回生66名、3回生54名、4回生9名)。回答者の平均年齢は19.91歳($SD=1.09$, 18~24歳)であった。

質問紙の構成

本研究の質問紙は、回答者の基本的属性に加え、①社会的比較志向性尺度、②同性同輩との身体部位比較尺度、③身体部位満足感尺度、④瘦身理想像内在化尺度、⑤回答者自身のBMIを算出するための設問群、⑥対同性同輩比較/対女性モデル比較尺度、⑦瘦身願望尺度から構成されている。本稿では、①、②、および⑥に関する結果のみ報告する。

(1) 社会的比較志向性尺度

先行研究(守安ら, 2011; 守安・諸井, 2012)と同様に、Gibbons & Buunk (1999)の尺度を用いて個人的傾性としての社会的比較志向性を測定した。先行研究での分析で共通に不適切と判断された1項目を除き(sc_a_2)、10項目に回答させた。これらの項目それぞれについて「この6ヵ月間」の回答者の生活を思い浮かべさせ、回答者自身の行動や気持ちにあてはまる程度をそれぞれ4点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」~「1. ほとんどあてはまらない」)。なお、評定順の効果を相殺するために、項目順の異なる2種類の評定用紙をランダムに並び替えた。

(2) 同性同輩との身体部位比較尺度

回答者が身体部位それぞれについて「自分の通学している大学の女子学生」とどのように比較しているかを測定した。このために、以下のようにして独自の尺度を作成した。

まず、身体をおおまかに顔全体、腕全体、胴体全体、脚全体に分割した。それぞれを詳細な部位に分割した。顔全体(頭部、額、眉、目、耳、鼻、頬、口、あご)、胴体全体(首、肩、胸、腹部、背中、腰、尻)、腕全体(上腕、前腕、肘、手首、手のひら、手の甲、指)、脚全

表 1 諸尺度の検討と尺度得点に関する記述的特徴

	平均値	標準偏差	相関値 (a)	信頼性 (b)	正規性検定 (c)
社会的比較志向性	2.92	0.44	.301 ~ .566	$\alpha=.792$	$z=1.306, p=.066$
対同性同輩比較	2.97	0.61	.393 ~ .775	$\alpha=.824$	$z=1.631, p=.010$
bo_comp_a_1 顔全体	3.11 c	0.92			$z=3.695, p=.001$
bo_comp_a_11 胴体全体 (頭, 首と手足を除いた部分)	2.88 b	1.01			$z=3.606, p=.001$
bo_comp_a_19 腕全体	2.28 a	1.03			$z=3.689, p=.001$
bo_comp_b_6 脚全体	3.42 e	0.77			$z=4.456, p=.001$
bo_comp_b_20 身体全体	3.27 d	0.78			$z=3.541, p=.001$
[反復測定分散分析]	$F_{(3.27/617.86)} = 86.06, p=.001$				
I. 顔全体・胸	2.16 b	0.69	.490 ~ .730	$\alpha=.888$	$z=.870, p=.436$
II. 骨格	1.94 a	0.74	.474 ~ .666	$\alpha=.829$	$z=1.420, p=.035$
III. 腿	3.04 c	0.89	.636 ~ .813	$\alpha=.866$	$z=2.497, p=.001$
IV. 手	2.00 a	0.78	.588 ~ .753	$\alpha=.828$	$z=1.927, p=.001$
[反復測定分散分析]	$F_{(2.58/487.14)} = 160.00, p=.001$				

N=190

(a): 当該項目得点と当該項目を除く合計得点との間のピアソン相関値 (すべて $p<.001$)

(b): Cronbach の信頼性係数

(c): Kolmogorov-Smirnov の検定

体(大腿, 下腿, 足, 膝, 膝の裏のくぼみ, すね, ふくらはぎ, 足首, くるぶし, 足の表, 足の裏, かかと, つま先)。さらに, これらの詳細部位項目に加えて(表 2, 付表 1 参照), 顔全体, 腕全体, 胴体全体, 脚全体, および身体全体の比較項目を設定した(付表 1 参照)。なお, 詳細な部位については, 名称がわかりにくいと判断した場合には説明文を付した。「この 6ヵ月間」の生活を思い浮かべさせ, 「回答者の通学している大学の女子学生」と, 身体の詳細部位および全体部位を表す項目, 合計 41 項目について, 日ごろどのくらい比較しているかを 4 点尺度で評定させた(「4. かなり比べる」~ 「1. ほとんど比べない」)。なお, 評定順の効果を相殺するために, 評定用紙を頁単位(2 頁)でランダムに並び替えた。

(3) 対同性同輩比較尺度

先行研究(守安ら, 2011; 守安・諸井, 2012)と同様に, 「回答者が通学している大学の女子学生」の外見や容姿などをどのくらい気にかけているかを 5 項目で測定した。各項目

それぞれについて「この 6ヵ月間」の回答者の生活を思い浮かべさせ, 回答者自身の気持ちにあてはまる程度を 4 点尺度で評定させた(「4. かなりあてはまる」~ 「1. ほとんどあてはまらない」)。なお, 評定順の効果を相殺するために, 評定用紙を頁単位(2 頁)でランダムに並び替えた。

Ⅲ. 結果

各尺度の検討

すべての尺度項目について, 項目平均値の偏り($1.5 < m < 3.5$)と標準偏差値($SD > .60$)のチェックを行い, 不適切な項目を除去した。その上で, 社会的比較志向性尺度と対同性同輩比較尺度では次のように単一次元性の検討を行った。①主成分分析における第 I 主成分の未回転主成分負荷量($> |.400|$)と説明率, ②当該項目得点と当該項目を除く合計得点のピアソン相関値と Cronbach の α 係数。尺度項目の平均値をそれぞれの尺度得点とした。身体部位比較尺度では, 因子分析(最尤法, プロマックス回

表2 身体部位比較尺度に関する因子分析(最尤法, プロマックス回転 <math>k=3</math>)の結果—回転後の負荷量—

	I	II	III	IV
〔I. 顔全体・胸〕				
bo_comp_a_7 鼻	.778	-.088	.152	-.021
bo_comp_a_8 頬 (目の下の出っ張った部分)	.738	.053	.030	.014
bo_comp_a_3 額 (髪の毛の生え際から眉の間)	.658	.035	-.191	-.008
bo_comp_a_5 目	.603	-.083	.178	.040
bo_comp_a_10 あご	.598	.187	.003	-.099
bo_comp_a_9 口	.559	.061	.111	.191
bo_comp_a_12 首 (頭と胴体の間)	.544	.180	-.122	.123
bo_comp_a_4 眉	.541	.077	-.111	.029
bo_comp_a_14 胸	.539	-.055	.103	-.037
bo_comp_a_2 頭部	.502	.019	-.076	.076
bo_comp_a_13 肩	.482	.209	-.020	.053
〔II. 骨格〕				
bo_comp_a_21 前腕 (肘から手首の間)	-.024	.823	-.062	.139
bo_comp_a_16 背中	.189	.539	.014	-.001
bo_comp_a_17 腰 (上半身を屈曲・回転できる場所)	.232	.513	.153	-.099
bo_comp_b_10 膝	.067	.421	.103	.000
bo_comp_b_12 すね (膝から足首の間)	.088	.408	.116	.025
bo_comp_a_18 尻	.325	.400	.197	-.061
〔III. 腿〕				
bo_comp_b_8 下腿 (膝から足首まで)	.006	.013	.910	.025
bo_comp_b_7 大腿 (足のつけ根から膝まで)	-.002	.082	.878	-.035
bo_comp_b_13 ふくらはぎ (すねの裏の膨らんだ部分)	-.103	.283	.526	.097
〔IV. 手〕				
bo_comp_b_4 手の甲 (手を握ると外側になる, 手首から指のつけ根までの面)	.059	-.042	.023	.851
bo_comp_b_3 手のひら (手を握ると内側になる, 手首から指のつけ根までの面)	.021	.071	-.074	.716
bo_comp_b_5 指	-.103	-.056	.317	.675
bo_comp_b_2 手首	.213	.081	-.080	.552
〔因子間相関〕				
	I	****	.614	.327
	II		****	.461
	III			****
				.326

N=190

初期固有値 >1.364; 初期説明率 59.18%

適合度: $\chi^2_{(206)}=431.275, p=.001$

転 $k=3$) を行い, 適切な因子解を探索した。負荷量 |.400| を基準に明確な負荷量パターンに達するまで分析を繰り返した。最終結果に基づき下位尺度項目を構成し (>|.400|), 先の①と②の分析を行った。

(1) 社会的比較志向性尺度および対同性同輩比較尺度

社会的比較志向性尺度 10 項目および対同性

同輩比較尺度 5 項目はすべて項目水準での分析で適切と判断された。表 1 に示すように, 2 つの尺度ともに単一次元性が確認され, 項目の平均値を尺度得点とした。なお, 対同性同輩得点の分布は正規性分布からの有意な逸脱を示したが, z 値の大きさから許容範囲と判断した。

(2) 身体部位比較尺度

顔全体, 胴体全体, 腕全体, 脚全体, および

表3 社会的比較志向性、対同性同輩比較、および身体部位比較の関係—ピアソン相関値—

	社会的比較志向性	対同性同輩比較	(a)
bo_comp_a_1 顔全体	.349 <i>p</i> =.001	.540 <i>p</i> =.001	<i>p</i> =.005
bo_comp_a_11 胴体全体 (頭, 首と手足を除いた部分)	.198 <i>p</i> =.006	.383 <i>p</i> =.001	<i>p</i> =.014
bo_comp_a_19 腕全体	.207 <i>p</i> =.004	.308 <i>p</i> =.001	<i>ns.</i>
bo_comp_b_6 脚全体	.371 <i>p</i> =.001	.507 <i>p</i> =.001	<i>p</i> =.049
bo_comp_b_20 身体全体	.330 <i>p</i> =.001	.516 <i>p</i> =.001	<i>p</i> =.008
I. 顔全体・胸	.330 <i>p</i> =.001	.411 <i>p</i> =.001	<i>ns.</i>
II. 骨格	.198 <i>p</i> =.006	.321 <i>p</i> =.001	<i>ns.</i>
III. 腿	.328 <i>p</i> =.001	.444 <i>p</i> =.001	<i>ns.</i>
IV. 手	.250 <i>p</i> =.001	.166 <i>p</i> =.022	<i>ns.</i>

N=190

(a) 相関値の大きさの差異 (社会的比較志向性得点と対同性同輩比較得点とのピアソン相関値: $r=.398, p=.001$)

身体全体の5項目を除く36項目を対象に項目水準の検討を行った。8項目が不適切であった ($m < 1.5$: bo_comp_b_17, bo_comp_b_1 bo_comp_b_19 / $m \geq 1.5$: bo_comp_b_11, bo_comp_b_18, bo_comp_b_16, bo_comp_b_15, bo_comp_a_6)。残り28項目を対象に因子分析を行った。初期因子固有値を基準に (>1.000) 2~5因子解を検討し、解釈可能な4因子解について分析を反復し、最終解を得た。これを表2に示す。因子負荷量の高い部位に基づき、それぞれ「I. 顔全体・胸」, 「II. 骨格」, 「III. 腿」, 「IV. 手」と名づけた。先述した手順で下位尺度を構成し、尺度の妥当性を吟味した。

各下位尺度は、表1から分かるように、すべて十分な信頼性を見せた。各下位尺度の得点分布の検討をすると、「I. 顔全体・胸」を除き、正規分布からの有意な逸脱が得られたが、 z 値の大きさから許容可能とした。反復測定分散分

析によってこれら4得点の比較を行うと、「II. 骨格」 \approx 「IV. 手」 $<$ 「I. 顔全体・胸」 $<$ 「III. 腿」の傾向が認められた。

全体部位の単一項目評定の検討

本研究では、詳細部位に加え、全体部位に対する同輩比較傾向も単一項目で評定させた。表1に記すように、反復測定分散分析によると、「腕全体」 $<$ 「胴体全体 (頭, 首と手足を除いた部分)」 $<$ 「顔全体」 $<$ 「身体全体」 $<$ 「脚全体」の傾向があった。ただし、正規性検定の結果、これらの得点分布が正規性分布から有意に逸脱していることを示した。

社会的比較志向性、対同性同輩比較、および身体部位比較の関係—ピアソン相関分析—

身体部位比較が社会的比較および対同性同輩比較とどのような関係にあるかを検討するために、ピアソン相関値を求めた。表3に示すよ

表4 対同性同輩比較の規定因一重回帰分析(変数追加法)一

従属変数 対同性同輩比較	標準化偏回帰係数			
[分析Ⅰ]				
社会的比較志向性	.398	p=.001		
	$R^2=.158$	p=.001		
[分析Ⅱ]				
社会的比較志向性	.256	p=.001		
bo_comp_b_20 身体全体	.432	p=.001		
	$R^2=.324$	p=.001	$\Delta R^2=.166$	p=.001
[分析Ⅲ]				
社会的比較志向性	.211	p=.001		
bo_comp_b_20 身体全体	.299	p=.001		
I. 顔全体・胸	.238	p=.007		
II. 骨格	-.033	ns.		
III. 腿	.189	p=.027		
IV. 手	-.184	p=.010		
	$R^2=.379$	p=.001	$\Delta R^2=.054$	p=.004
[分析Ⅳ]				
社会的比較志向性	.177	p=.005		
bo_comp_b_20 身体全体	.093	ns.		
bo_comp_a_1 顔全体	.272	p=.001		
bo_comp_a_11 胴体全体(頭, 首と手足を除いた部分)	.046	ns.		
bo_comp_a_19 腕全体	.038	ns.		
bo_comp_b_6 脚全体	.210	p=.007		
	$R^2=.402$	p=.001	$\Delta R^2=.077$	p=.001

N=190

 ΔR^2 : R^2 変化量

[説明変数投入の手順]

分析Ⅰ: 社会的比較志向性

分析Ⅱ: 分析Ⅰに身体全体(単項目)追加

分析Ⅲ: 分析Ⅱに比較4下位尺度得点追加

分析Ⅳ: 分析Ⅱに比較4項目(単一項目)追加

うに、すべてで有意な正の相関値が見られた。

社会的比較志向性と対同性同輩比較での相関値の大きさを比較した。単一項目評定ではいずれの場合にも対同性同輩比較のほうが高い相関値が得られたが、「腕全体」では有意差は見いだされなかった。身体部位比較4下位尺度得点の場合には、「IV. 手」を除き対同性比較の相関値のほうが大きい傾向があったが、いずれの場合も有意水準には至らなかった。

対同性同輩比較の規定因の検討

対同性同輩比較の規定因を探索するために、次の手順で対同性同輩比較を従属変数とする一連の重回帰分析(変数追加法)を行った。

分析Ⅰでは個人的傾性である社会的比較志向性を説明変数とし、分析Ⅱではさらに身体全体での比較(bo_comp_b_20)を投入した。これによって、対同性同輩比較が個人的傾性としての他者比較傾向よりも身体全体に焦点をあてた比較に影響されているかが明らかになる。次に、分析Ⅲでは、分析Ⅱでの2説明変数に加

え、身体部位比較4下位尺度得点を説明変数に追加した。この分析で、対同性同輩比較に対する身体部位比較変数全体の相対的影響が浮き彫りになる。さらに、分析Ⅳでは、おおまかな身体部分比較に関する4つの単一項目得点を分析Ⅱでの2説明変数に追加した。これは分析Ⅲと同様の目的のために行った。一連の重回帰分析の結果を表4に示す。

分析Ⅱを見ると、個人的傾性としての比較傾向とは独立に身体全体比較が対同性同輩比較を規定しており、対同性同輩比較尺度が単に日常の一般的な比較傾向を捉えているのではなく、同性同輩との身体全体の比較を反映していることになる。

身体部位比較に関する4下位尺度得点を追加した分析Ⅲでは、「Ⅰ. 顔全体・胸」と「Ⅲ. 腿」が有意な正の規定因、「Ⅳ. 手」が有意な負の規定因であった。また、これら4得点の追加は説明率の有意な増加を示した。標準化偏重回帰係数と見ると、「Ⅰ. 顔全体・胸」の影響力($\beta = .238$)は「身体全体」($\beta = .299$)に次ぐものであった。

分析Ⅳでも、4変数の追加が有意な増加を見せたが、「身体全体」の影響力が消失し($\beta = .093$)、「顔全体」と「脚全体」が有意な正の規定因となった。「顔全体」の影響力が最も高かった($\beta = .272$)。

Ⅳ. 考察

本研究の主目的は、これまでの研究(守安ら, 2011; 守安・諸井, 2012)で瘦身願望の影響因として認められた「対同性同輩比較(回答者と同じ大学に通学する女子学生との体型比較)」が身体全体の比較を指すのか、身体の特定位位比較の反映であるかを明らかにすることであった。

このために、本研究では、回答者に詳細な身体部位比較と部位全体の比較(単一項目評定)を求めた。詳細な部位比較については因子分析の結果に基づいて下位尺度を構成した。一連の重回帰分析は、次のことを示した。「容姿」、「体

つき」、「装い」、「外見」、「体型」という言葉を用いて測定した対同性同輩比較は、実は「顔部位」の比較にかなり依存していた。対同性同輩比較尺度の作成意図は、身体全体の比較の測定であった。下位尺度得点を対象とした分析(分析Ⅲ)では、「身体全体」比較の影響力は「Ⅰ. 顔全体・胸」比較とほぼ同等でしかなく、単一項目評定による分析では(分析Ⅳ)「身体全体」の影響は認められなかった。

これらの結果は、「容姿」、「体つき」、「装い」、「外見」、「体型」という言葉を用いて同輩の女子学生との比較を求めると、回答者は自分自身と同輩の女子学生の「顔部位」の様相を思い浮かべながら回答していることを示している。これは、日常の相互作用場面の仕方によると考えられる。親友など親しく交流している他者とは、「顔部位」以外の部位の観察をしたり、その部位に関するコミュニケーションを交わす可能性がある。しかし、同じ大学に通学する女子学生とは、通学時や授業時に観察するのは「顔」を中心とした部分であろうし、身体情報の交換はあまりないと思われる。

以上のように解釈すると、前研究のように「親友」を比較他者とした場合には(守安・諸井, 2012)、同輩の女子学生を比較他者とした本研究の結果と異なり、「顔部位」比較の優位性が緩和されるはずである。今後、このことを確認する必要があるだろう。

また、身体の詳細な比較は、①「自分の通学している大学の女子学生」との比較、②比較対象が身体という点から、他者との一般的な比較傾向を表す社会的比較志向性よりも、対同性同輩比較と強い関連を示すはずである。しかしながら、単一評定項目ではこの予測が支持されたが、下位尺度得点で分析した場合には支持されなかった(表3)。さらに、平均値比較で(表1)、2種類の得点ともに(単一評定項目「脚全体」、下位尺度得点「Ⅲ. 腿」)、脚部は最も比較対象とされる部位であった。この部位は、重回帰分析においても対同性同輩比較の有意な規定因であった(表4)。以上の結果についても今後精

緻に検討すべきであろう。

社会心理学分野における顔に関する研究は、人のもつ特性間の結びつきに関する信念体系が一般に人々によって抱かれているという Bruner & Tagiuri (1954) によって提起された暗黙の性格理論 (implicit personality theory) に基づき顔の相貌的特徴認知から性格特性の推測のメカニズムを解明する多くの研究が行われた (諸井, 1995 など)。さらに、現在では、認知心理学を中心に顔認知を支えるメカニズムを明らかにする研究が幅広く取り組まれている (吉川・益谷・中村, 1993 参照)。また、「顔」への学問的関心は、「日本顔学会」への創設にまで広がっている (伊藤・島田, 2007 参照)。

ここで、体型比較の際に「顔部位」比較が重要となるのかを心理学以外の論究と関連づけて考察しよう。鷺田 (1998) による「顔」に関する現象学的論究によれば、顔の認知には自己と他者との間で「アンバランスな構造」が存在する。つまり、「他者がわたしを〈わたし〉として認知してくれるその媒体としての顔が自分にだけは見えない」のである。「顔部位」比較の反映である他者との体型比較が、鷺田の指摘する「アンバランスな構造」の枠組みの中で自己の体型上の劣等を喚起し (理想像を内在化しているほど喚起される)、結局のところ瘦身願望を高めるのかもしれない。

「顔」の問題を歴史文化的に考察した村澤 (2007) は、被り物などで物理的に顔を隠す行為と、内面を出さないという行為の2側面をもつ「顔隠しの文化」が平安時代以来わが国に存在することを指摘した。この「顔隠し」という考えに基づく、同輩との体型比較は、身体全体の漠然とした形で営まれるはずである。比較のための他者の「顔部位」への関心は自分の「顔部位」を相手に曝す危険があり (視線の交差)、村澤の指摘する「顔隠し」に反するからである。化粧行動を詳細に検討した諸井・板垣 (2013) は、化粧行動が単純な外見的顕示を意識した施しから開始され、いったんは基礎補整的な施しに向かい、最終的には下地処理となる

ことを示唆した。つまり、化粧によって自分の「顔」を隠した (つमりの) 状態で他者の「顔部位」への注視を意識的に行っているとすれば、本研究の結果は、村澤が言う「顔隠し」と整合する。

ところで、従来の研究で得られた「対同性同輩比較→瘦身理想像内在化→瘦身願望」という影響経路について本稿では省略したが、本研究でもこの影響経路は再確認された。今回の報告で取り扱った詳細な部位比較の問題から、次のことが考えられる。先行研究では、Stice *et al.* (1996) の尺度項目に従って回答者が理想的身体ステレオタイプを内在化している程度を測定した。これらの項目内容を見ると (守安ら, 2011)、大半の項目で「身体」、「細身」、「体つき」など全体的印象を示す言葉が使用されている (1項目のみ「脚が長い」という特定部位の状態を表す表現がされている)。Thompson & Stice (2001) が焦点化した瘦身理想像内在化は身体全体の瘦身性に関わる概念であり、「顔部位」ではない。しかしながら、本研究の結果に従うと、この瘦身理想像内在化も「顔部位」(瘦身顔) を反映している可能性がある。今後、このことも検討すべきである。

本研究で明らかになった「顔部位」比較を支えるメカニズムを、本稿では報告しなかった「対同性同輩比較→瘦身理想像内在化→瘦身願望」の影響経路と関連させながら、今後も社会的比較の観点から瘦身願望に関する実証的検討を継続させていく予定である。

〈付記〉

- (1) 本研究は、守安可奈 (生活科学研究科・生活デザイン専攻 2012 年度修了) が第1著者の下で修士論文研究のために収集したデータに基づいている。
- (2) 本研究の実施にあたって、科学研究費助成金 (基盤研究(C)、代表者: 諸井克英「瘦身モデルが瘦身願望におよぼす社会心理学的影響—社会的比較理論の導入—」〈研究課題番号: 23530834〉, 2011~2013 年度) を利用した。

- (3) データの統計的解析にあたって、*IBM SPSS Statistics version 20.0.0 for Windows*を用いた。

V. 引用文献

- Bruner, J., and Tagiuri, R. 1954 The perception of people. In G. Lindzey (Ed.), *Handbook of social psychology vol. II*, Reading Mass.: Addison-Wesley. Pp.634-654.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison process. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- Gibbons, F. X., and Buunk, B. P. 1999 Individual differences in social comparison : Development of a scale of social comparison orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 129-142.
- 伊藤学而・島田和幸(編) 2007『かお・カオ・顔—顔学へのご招待—』あいり出版
- 守安可奈・諸井克英 2012 瘦身願望と社会的比較(Ⅱ)—親密な他者との比較の影響— 同志社女子大学生生活科学, **46**, 21-28.
- 守安可奈・諸井克英・前原 澄・松谷歩美・小切間美保 2011 瘦身願望と社会的比較(Ⅰ)—瘦身理想内化の仲介効果— 同志社女子大学生生活科学, **45**, 29-36.
- 諸井克英 1995 孤独な顔—暗黙の性格理論によるアプローチ— 人文論集(静岡大学人文学部), **46(1)**, 51-79.
- 諸井克英・板垣美穂 2013 化粧行動の基本的構造の探索 総合文化研究所紀要(同志社女子大学), **30**, 22-29.
- 村澤博人 2007『顔の文化誌』講談社学術文庫
- Stice, E., Ziemba, C., Margolis, J., and Flick, P. 1996 The dual pathway model difference bulimics, subclinical bulimics, and controls: Testing the continuity hypothesis. *Behavior Therapy*, **27**, 531-549.
- Thompson, J.K., and Stice, E. 2001 Thin-ideal internalization: Mounting evidence for a new risk factor for body-image disturbance and eating pathology. *Current Directions in Psychological Science*, **10**, 181-183.
- 鷺田清一 1998『顔の現象学—見られることの権利—』講談社学術文庫
- 吉川左紀子・益谷 真・中村 真編 1993『顔と心—顔の心理学入門—』サイエンス社

付表 1 身体部位比較尺度に関する残余項目および全体部位評定項目

[残余項目]
bo_comp_a_6 耳
bo_comp_a_15 腹部
bo_comp_a_20 上腕(肩から肘の間)
bo_comp_b_1 肘
bo_comp_b_9 足(足首からつま先まで)
bo_comp_b_11 膝の裏のくぼみ
bo_comp_b_14 足首
bo_comp_b_15 くるぶし (足首の関節の内外・両側にある突起した骨)
bo_comp_b_16 足の表 (足首からつま先の間、爪の見える面)
bo_comp_b_17 足の裏 (立ち上がった時に地面と接する面)
bo_comp_b_18 かかと (足の裏の後部、足首の下にあたる部分)
bo_comp_b_19 つま先 (足の先端部の指がある部分)
[全体部位評定項目]
bo_comp_a_1 顔全体
bo_comp_a_11 胴体全体 (頭、首と手足を除いた部分)
bo_comp_a_19 腕全体
bo_comp_b_6 脚全体
bo_comp_b_20 身体全体